

高齢者の社会関係の広がりと質

石塚 優

- I はじめに
- II 方法
- III 結果
 - 1 社会関係の広がり
 - 2 近所の人とのつきあいの量と質
 - 3 社会関係の親密度と相互の支援
- IV 考察

<要旨>

政令市の中で最も高齢化率が高い北九州市の 60～79 歳の高齢者の社会関係（広がり（量）と親密度（質））について近所の人との関係を中心に検討した。「家族同様につきあう」相手の広がり、つきあいのきっかけとして「親戚」「仕事」「同窓・同級生」等が多く占め、居住校区内よりも校区外に多かった。近所の人とのつきあい方ではその 7 割以上を「道端・路上での立ち話」や「挨拶程度」「つきあいがほとんどない」で占める等、社会関係の低調さが認められる反面、つきあいのある人の 4 割程度が「双方の家」でのつきあいがある等の親密さも認められた。この近所の人との相互支援に関しては「会話の頻度」が高いほど双方で支援し合う傾向が認められたが、これらの生活機能と年齢は負の関連性が認められた。

<キーワード>

社会関係の量 (width of social relationships)、社会関係の質 (depth of social relationships)、親密度 (intimacy)、自己開示 (self-disclosure)、相互支援 (mutual aid)

I はじめに

高齢者の社会関係としては、子どもとの交流頻度を含め家族、親族との関係が多く対象とされてきた（個人的ネットワーク）。本来、高齢者の介護は子どもや配偶者、あるいは親族が行うとされていた時代が長かったためでもある。また、産業化、都市化の進展とともに相互扶助機能（全体的・社会的ネットワーク）をもつ共同体が機能を失い、核家族化が進む途上で、子どもとの距離が課題とされていた時代の視点でもあろう。高齢者保健福祉推進十カ年戦略が始まり、居宅生活支援事業が第二種社会福祉事業に位置づけられた 1990 年代の初頭でも、家族が同居あるいは同じ敷地内に居住している場合には居宅サービスを提供しなかったのであるから、家族を介護や世話の中心に据えて、福祉の含み資産と見なしていた時代は長いのである。事実、1970 年代には鍵っ子とともに鍵を持たない高齢者が問題となっていた。子ども夫婦と同居していても、子どもが共働きで、出勤とともに一緒に家を出て、子どもが帰るまで行く当てがなく老人福祉センター等で一日を過ごし、センター閉館とともに公園で子どもの帰りを待つ高齢者である。このような問題の所在が家族関係に焦点を当てさせていたともいえる。

これが、居宅でのサービスメニューが増加するとともに高齢者数の増加が介護や世話のみではなく、生きがいや生活支援、あるいは介護予防の視点や相互扶助的、自助的機能をもつ地域づくりを視野にいたした社会参加や地域活動が注目されることで、高齢者の社会関係に関する調査研究は家族・親族から、近隣・参加団体へと範囲を広げていくことになる。しかし、この過程で、80歳代の父親が40歳代の障害者の息子の世話をしている家族への支援が父親の頑な拒否によりできない等の例は多く認められた。理由は簡単である。かつて父親は息子の世話への支援を行政に申請して、家族が同居という理由で拒否された経験を持ち、二度と行政の世話にはならないと固く決めていたためである。そのために家族の有無がサービス提供の条件ではなくなっても、自ら申請はせず、近隣の住民の要請による行政の支援申し出を頑に拒否している。90年代にはこのような事例が多く発生しているが、家族が世話をし、サービスは補助的な位置づけであったことの弊害であろう。このような経過から家族問題の一環としても高齢者と家族の関係を調査することは重要であった。このように家族から近隣・参加団体や社会参加、地域活動へと社会関係の注目が移る途上には多くの弊害が認められ、これらのために家族以外の世話にはならないことを自立とする高齢者も多く存在する。

以下でも、同様に近隣・参加団体等を調査することにより、高齢者の社会関係の量と質について検討した。つきあいの広がりや量を量として、つきあいの内容を質とした。例えば多様な集団に参加していても質は分からないが、量として捉えることはできる。その量の中で、相互に助け合い、支援しあう関係や、相互に行き来する関係は親密な関係として質を表しているといえる。その質の高い（親密な）関係を生活の中核と見なせば、高齢者の社会関係の中核がそこにあるということができよう。

以上、①高齢者の社会関係の量

②高齢者の社会関係の質

③高齢者の生活の中核の所在

について検討する。

Ⅱ 方法

調査は2006年11月に北九州市に居住する20～79歳の1,500人を対象として郵送法により実施した。調査対象者の抽出は選挙人名簿から無作為二段抽出法により行った。有効回収数は698人（有効回収率46.5%）である。この内、60歳以上の257人を以下では対象とした。

二段抽出の第一次抽出は地区（商業地区、混住地区、住宅地区）、第二次抽出は個人である。

社会関係としては「参加団体とそれへの参加頻度や大事さ」「家族同様につきあっている人」「近所の人との会話の頻度やつきあい方」「相互の手助けの有無」等の質問をした。この質問の中から、社会関係の広がりとして「参加団体とそれへの参加頻度や大事さ」「家族同様につきあっている人」「近所の人との会話の頻度やつきあい方」等、社会関係の質として「家族同様につきあっている人」「近所の人との会話の頻度やつきあい方」「相互の手助けの有無」等が考えられる。これらの中からいくつかを検討する。また、以下の図表では「無回答」や「その他」及び頻度の低い項目は省略している。

回答者の基本属性は表1の通り。

表1 基本属性

性別	男性	女性						
	132	125						
	51.4	48.6						
婚姻関係	既婚	未婚	死別・離別	無回答				
	205	7	44	1				
	79.8	2.7	17.1	0.4				
居住年数 (他に無回答 2(0.8))	1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上
	2	4	4	16	30	43	61	95
	0.8	1.6	1.6	6.2	11.7	16.7	23.7	37.0
最終卒業 学校	旧制尋常・高等 小学校	旧制中学校	旧制高校・旧制 大学	新制中学校	新制高校	新制短大 高専専門 学校	新制大 学・大学 院	無回答
	12	26	3	29	114	20	42	11
	4.7	10.1	1.2	11.3	44.4	7.8	16.3	4.3
職業	農業	自営業	会社経営 者・役員	専門職	管理職 (課長以上)	民間常雇 従業者	公務員等 常雇従業者	派遣社員・臨時 雇用
	1	38	8	8	7	12	2	17
	0.4	14.8	3.1	3.1	2.7	4.7	0.8	6.6
	その他	家事専業	無職	無回答				
	5	52	104	3				
	1.9	20.2	40.5	1.2				

(上段は実数、下段は構成比)

平均居住年数は 29.8 年、標準就学年数は 14.0 年である。

Ⅲ 結果

1 社会関係の広がり

(1) 家族同様のつきあいのある人

表2は「家族同様のつきあいのある」人の平均人数を示している。兄弟・姉妹や親戚を含む人数であり 50 人を超える回答も見られたが、参加する団体の構成員数と推測できる回答も散見されたために 20 人以上を外れ値として処理した結果を示している。

これより、第一に校区内よりも校区外の人とのつきあいが多いことが分かる。第二に性別では、校区内は女性、校区外は男性の方がつきあいある平均人数が多い。次に年代別では男性も女性も 60 歳代の方がつきあいのある人数が多いことが分かる。

これにより、校区内という近所の人とのつきあいよりも校区外の人とのつきあいの方が多いこと。近所の人とのつきあいは女性の方が多いこと。年齢が高くなるに従い（校区内では 70 歳以上の男性が 60 歳代の男性よりも多いが）、社会関係が縮小する傾向があること等が分かる。

表2 家族同様のつきあいのある平均人数

校区内	合計		2.04
	男性	60 歳代	1.75
		70 歳以上	2.23
		合計	2.00
	女性	60 歳代	2.67
		70 歳以上	1.38
		合計	2.12
校区外	合計		3.74
	男性	60 歳代	4.08
		70 歳以上	3.66
		合計	3.89
	女性	60 歳代	4.25
		70 歳以上	2.68
		合計	3.58

(2) 親しくなったきっかけ

親しくなったきっかけは、図1の通り、校区内では「近所の人」が多く、「親戚」や「趣味・学習活動を通して」「子どもを通して」がこれに続いて多い。校区外では「親戚」が顕著に多くなり、「仕事

関係」「同窓生・同級生」「近所の人」「趣味・学習活動を通して」がこれに続いている。

一方、性別では「仕事関係」に大差が認められると仮定したが、校区内外ともに大きな差は認められなかった。性差が認められたのは校区外の「趣味・学習活動を通して」や「信仰を通して」が女性の方が多いことである。これらは多重回答である。

図1 親しくなったきっかけ（全体）

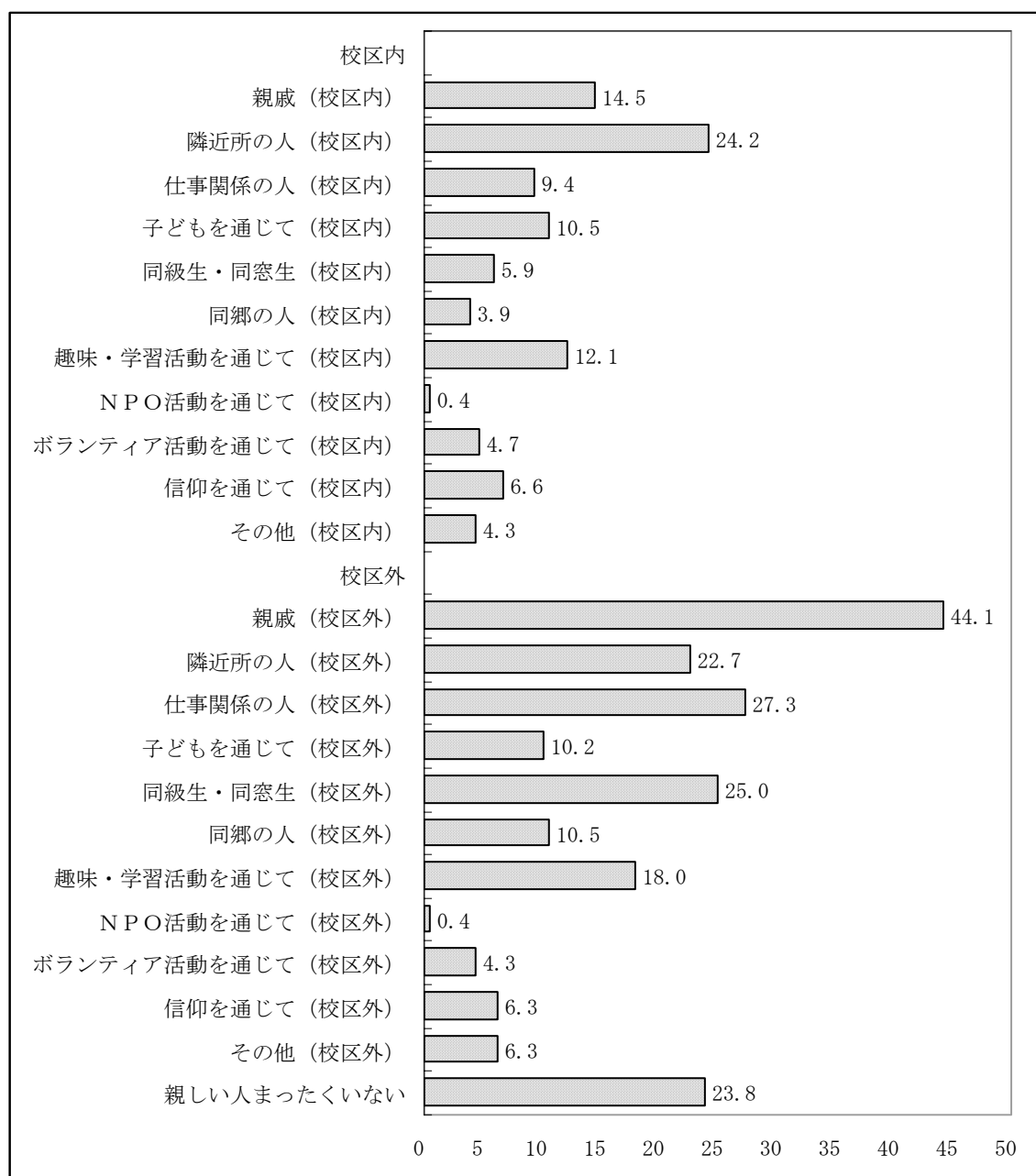
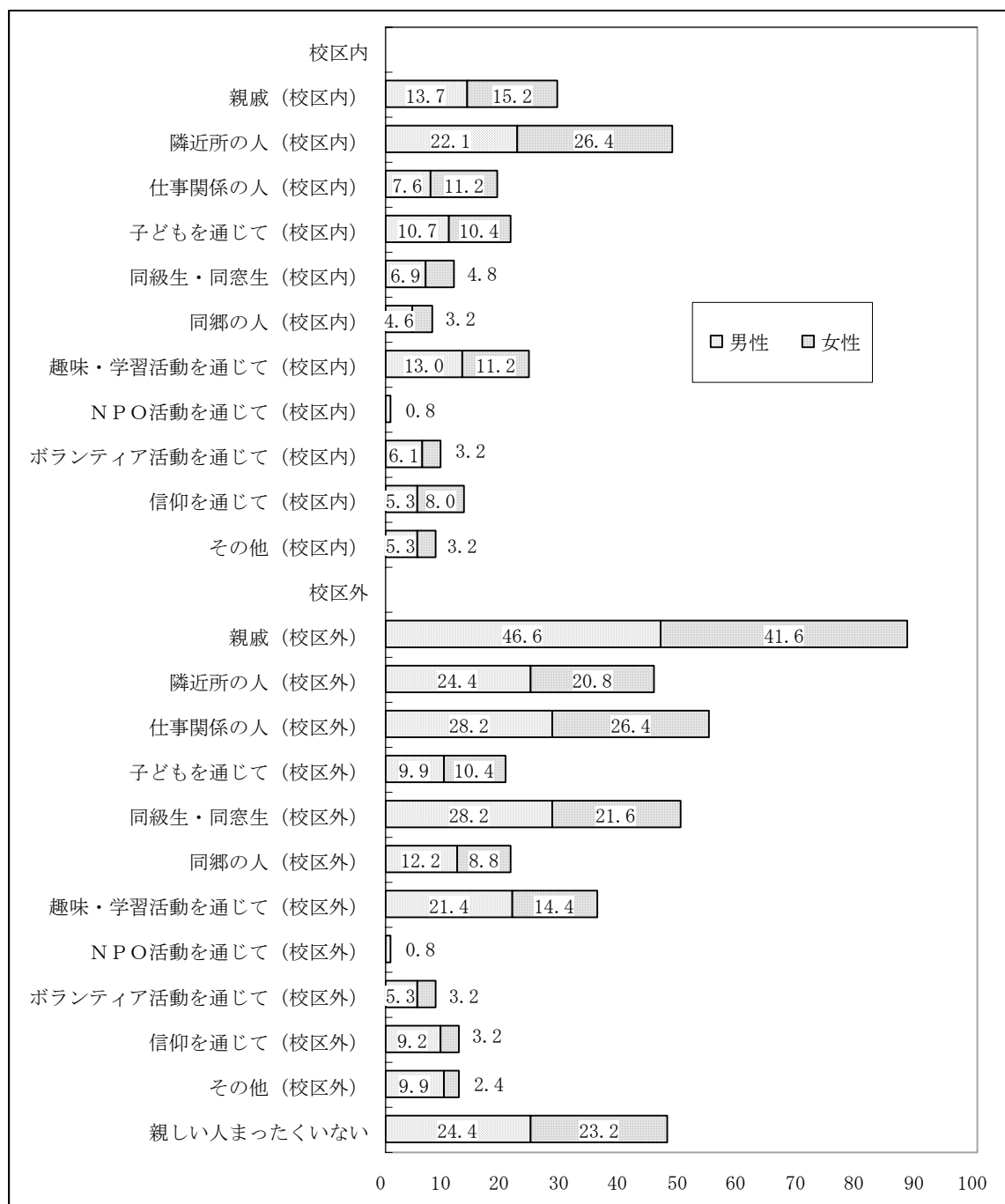


図2 親しくなったきっかけ（性別）



以上、家族同様につきあっている人は校区外の方が多く、その主な相手は「親戚」「近所の人」「趣味・学習活動の仲間」であり、人数は0～7人程度の幅があるということが分かるが、「まったくいない」という回答が4分の1近くあることは留意を要する。

ここでは主に家族同様につきあいのある人数という量的な側面を紹介したが、つきあいの空間的広がりという観点では、親戚や趣味・学習活動の仲間がどこに居住しているかに左右される面がある。つまり、社会関係は年齢とは負の相関を、居住地や居住年数と親戚の居住地とが強い関わりを示すと

推測できる。

家族同様のつきあいでもその実際の内容は不明であるが、ジュラード（Jourars, S. M., 1964, 1971）は親しさが増すほどプライバシーに関する会話が増加すると指摘している。しかし、プライバシーに関する会話が増加するのは親密度が増す過程であり、親密になるほどにプライバシーに関わる会話よりも共に行動する機会が増加し、趣味や好みを共有しプライバシーも含めて自己開示（self-disclosure）が生活の多くの側面で進展すると考えられる。その一つの指標として以下では相互に支援する関係や互いの家を行き来する関係を取り上げ、社会関係の質として検討する。

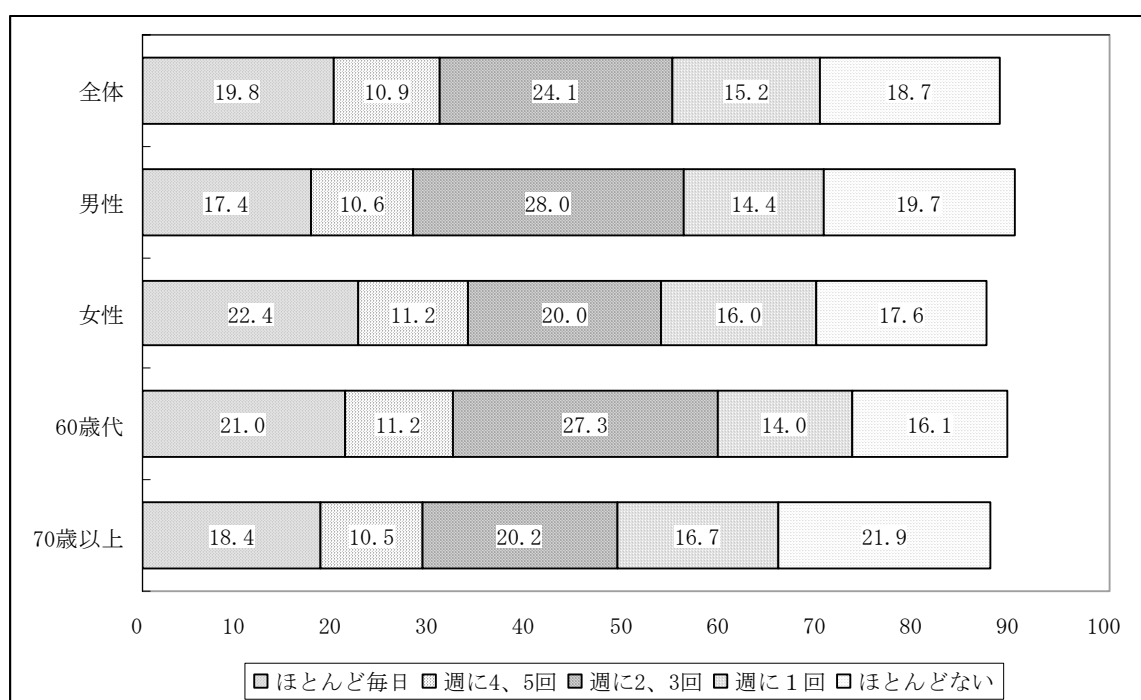
2 近所の人とのつきあいの量と質

近所の人とのつきあいとしては「近所の人との交流頻度」を社会関係の量として、「近所の人との交流の内容」「近所の人との交流の場」をその質として検討した。

（1）近所の人とのつきあいの量

近所の人とのつきあいの程度では「週に2～3回以上」交流がある人が8割程度を占めており、交流は多いと思われる。また、「ほとんど毎日」近所の人と交流がある人は約2割存在し、さらに「週に4～5回」を加えると3割以上になる。一方、「ほとんどつきあいが無い」人も2割近く存在する。

図3 近所の人との会話の程度



しかし、社会関係の成立に近所の人の影響が極めて低いのが都市での特徴であることから、性別で近所の人との交流を見てみると、1週間での交流頻度は女性の方が高い（「毎日」「週に4～5回」）ものの、「週に2～3回」や「週に1回程度」の交流では男性の方が多くなる。頻度は女性の方が多く、近所の人とのつきあいの量としては女性が多いといえるようである。

さらに年齢による変化を見てみると、図3の通り、70歳以上の方が近所の人との交流が少ないことが分かる。上述したように年齢は社会関係に負の関わりをもつことが示唆されている。

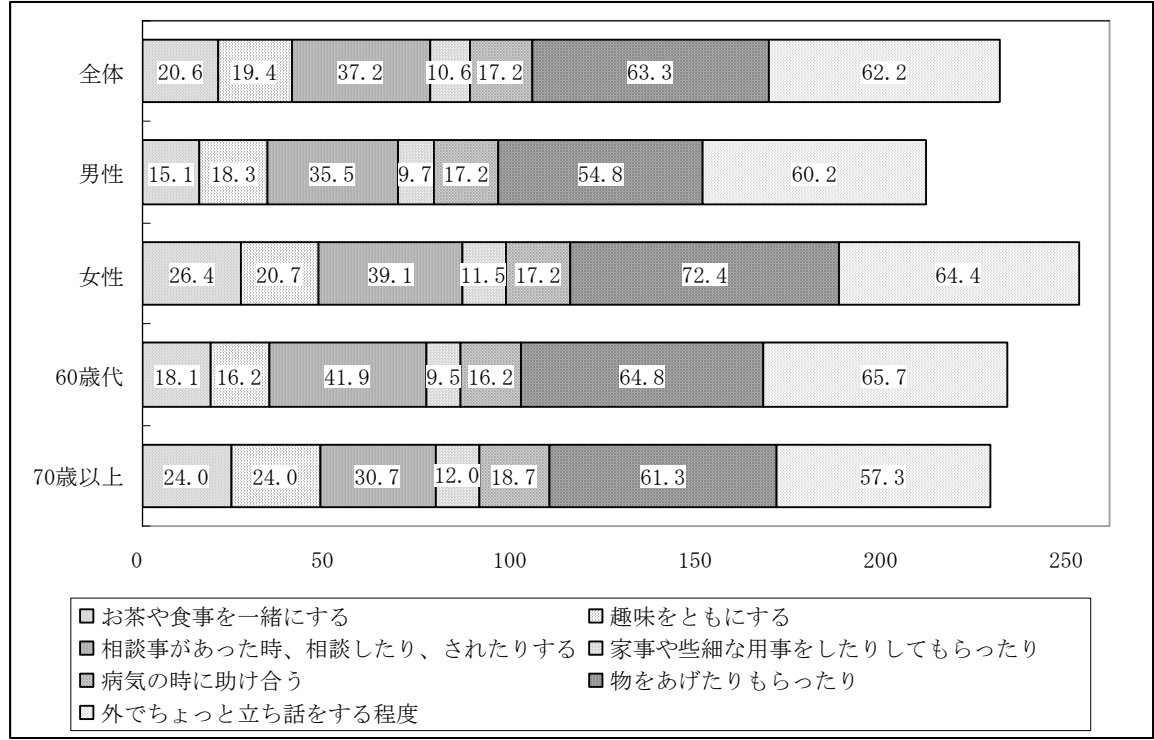
(2) 近所の人とのつきあいの内容

近所の人とつきあいのある人がどのようなつきあいをしているのかを検討した。これは親密度という質に関わる側面である。これらは多重回答である。

お茶や食事や些細な用事をしたりしてもらうのは親密な関係であろうし、病気の時に助け合うのは親密な関係であると思われる。以上の関係を親密な関係とすると、全体では半数近くが近所の人と親密な関係をもち、性別では交流頻度では差がなくても親密さでは女性の方が親密な近所の人との関係を持っているといえる。年齢では顕著な違いがみとめられないようである。

ただし、外でちょっと立ち話をする程度の関係も6割以上存在し、「挨拶程度」や「立ち話程度」の相手も多いことが分かる。「物をあげたり、もらったり」の関係も「挨拶程度」や「立ち話程度」の延長にあり、親密な相手とはいえず、会話は多いが浅い関係といえよう。

図4 近所の人とのつきあいの内容（ほとんどいない人を除く）

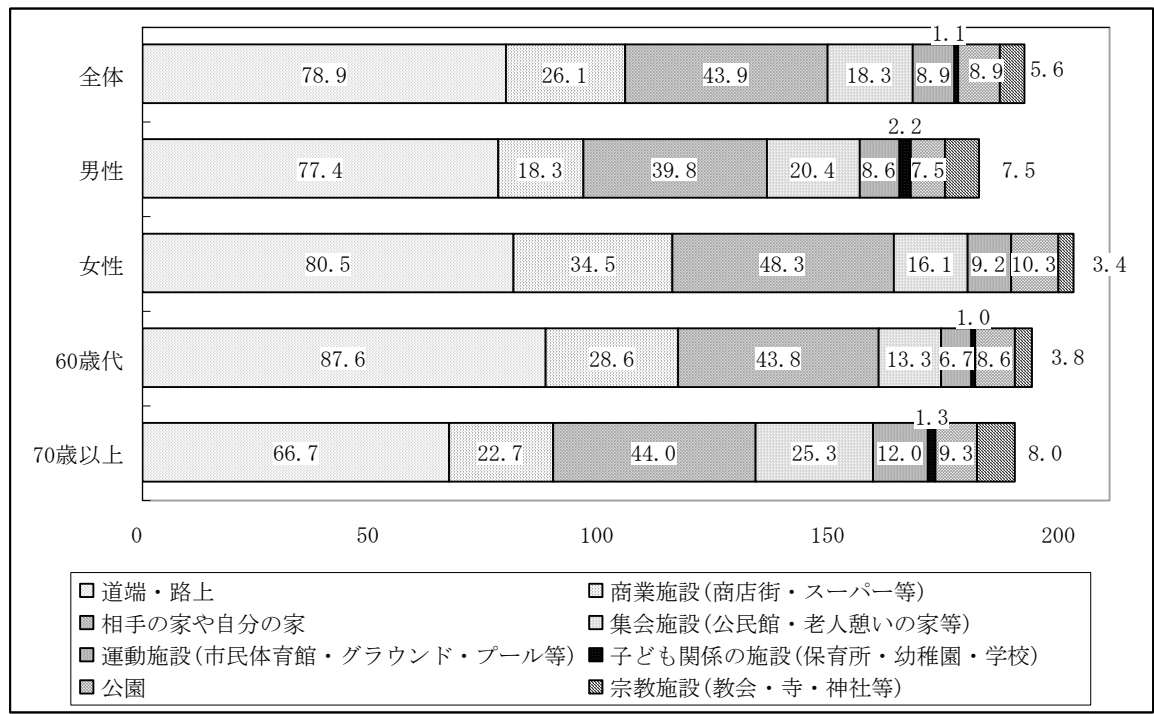


(3) 近所の人とのつきあいの場

つきあいの場も質的側面を表している。これらは多重回答であるが、「立ち話程度」や「挨拶程度」では路上になるであろうし、これも親密度を表している。これを示す図5では「道端・路上」が全体で8割近くの人とのつきあいの場である。「公園」も親密な関係とはいえないかもしれない。これらの結果から全体では、つきあいのある近所の人1～2割程度が親密な関係であり、その1～2割程度の親密な関係の近所の人の中の4割程度とは「互いの家でつきあう」関係であることが示唆されている。

上述した、知り合うきっかけでも、ここでの近所の人とのつきあいでも「子どもを通じた」きっかけやつきあいが少ないことが分かるが、子どもの少なさを反映しているといえる。

図5 近所の人とのつきあいの場（ほとんどいない人を除く）



3 社会関係の親密度と相互の支援

相互支援はつきあいとは関係なく行われる場合もあるため、これをそのまま質的な指標として捉えることはできないが、近所の人との相互の支援の程度は近所という地域のまとまりを示しているともいえるので、全体的社会関係のネットワークの質として参考までに検討した。

(1) 相互支援の内容と親密度

表3及び4は近所の人との相互支援の上位の内容を性別、年代別で示している。これを見ると60歳以上の人の4割以上が「高齢者の見守り・声かけ」の手助けをしたことがある。特に女性と60歳代の半数近くが「高齢者の見守り・声かけ」をしていることになる。「高齢者の見守り・声かけ」が突出して多いのであるが、そのほかにも「情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）」「相談に乗った」等の手助けは2割以上の人が行っている。

女性は「子どもの世話をした」「食事を作った・食事を届けた」「買い物をした」等、男性は「庭の除草・剪定・手入れ」「家の補修・手入れ（電球の取替えなど含む）」「相談に乗る」等に特徴がある。

また、年代では60歳代に比べて70歳以上では手助けをすることが全体的に減少するが、「高齢者の見守り・声かけ」に関しては4割近い人が行っている。一方、60歳代では「情報提供（お買い物・

病院・福祉・教育の情報」が顕著に多く、情報面での 60 歳代の役割が伺われる。

表 3 相互の支援の上位の内容（性別／多重回答）

		合計	男性	女性
手助けした	高齢者の見守り・声かけをした	41.6	36.4	47.2
	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	23.3	25.0	21.6
	相談に乗った	21.4	24.2	18.4
	子どもの世話をした	14.4	11.4	17.6
	庭の除草・剪定・手入れをした	14.0	18.2	9.6
	食事を作った・食事を届けた	11.7	6.1	17.6
	留守番・留守宅の見守りをした	10.9	9.1	12.8
	家の補修・手入れ（電球の取替えなど含む）	8.9	11.4	6.4
	買い物をしあげた	8.9	7.6	10.4
手助けしてもらった	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	17.1	15.9	18.4
	高齢者の見守り・声かけをしてもらった	16.0	15.9	16.0
	相談に乗ってもらった	10.1	10.6	9.6
	留守番・留守宅の見守りをしてもらった	10.1	9.8	10.4
	食事を作ってもらい・食事を届けてもらう	7.0	4.5	9.6
回答者数		257	132	125

表 4 相互の支援の上位の内容（年代別／多重回答）

		60 歳代	70 歳以上
手助けした	高齢者の見守り・声かけをした	46.2	36.0
	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	30.8	14.0
	相談に乗った	23.1	19.3
	子どもの世話をした	14.7	14.0
	庭の除草・剪定・手入れをした	16.1	11.4
	食事を作った・食事を届けた	11.9	11.4
	留守番・留守宅の見守りをした	11.2	10.5
	家の補修・手入れ（電球の取替えなど含む）	11.2	6.1
手助けしてもらった	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	20.3	13.2
	高齢者の見守り・声かけをしてもらった	16.1	15.8
	相談に乗ってもらった	10.5	9.6
	留守番・留守宅の見守りをしてもらった	9.8	10.5
	食事を作ってもらい・食事を届けてもらう	7.0	7.0
回答者数		143	114

「手助けしてもらった」人は「手助けした」人よりもかなり減少し、上位5番目までの内容でも1割を下回る。その内容は、全体では「情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）」「高齢者の見守り・声かけをしてもらった」等が上位であるが2割に満たない。

性別では女性の方が多少手助けしてもらうことが多い傾向を示しているが、大差がない。年代別でもこの傾向は変わらず、女性と同様に70歳以上の人が「高齢者の見守り・声かけをしてもらった」が多い程度である。このことは年代が上がると手助けをしてもらうことが増加すると予測していたが、70歳代程度では60歳代と大きな違いがないことを示唆している。

以上の結果のように、近所の人との相互の助け合いは「高齢者の見守り・声かけ」や「情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）」に代表される形で行われてはいる。しかし、このことが親密度とどのように関わるかはこれだけでは不明である。つまり、社会関係の質としての親密度と近所の人との相互支援との関連が不明である。親密度が高ければ相互支援は多くなると考えられるが、それを検討するために近所の人とのつきあいの程度と相互支援の関連を見ることにする。

（2）近所の人とのつきあいと相互支援

表5は近所の人との会話の程度と相互支援との関連を示している。これには支援の内容を全て示した。

この結果から明らかな通り、「ほとんど毎日会話している」から「ほとんど交流がない（表中では「ない）」までの差は明らかである。最もよく行われている「高齢者の見守り・声かけ」を見ても会話の頻度で大きな違いが認められる。また、「手助けをする」「手助けをしてもらう」の両者ともにこの差は明らかである。見知った他者ということもあり、挨拶のみの場合でもほとんど毎日会話をするという可能性を否定できないため、会話の頻度が親密度の程度を表すとは言い難いが、「ほとんど毎日」と「週に4、5回」はほとんど同じとしても、結果は会話の頻度と相互支援には強い関連性の存在を示している。親しい人同士ほど支援をし合うということである。

IV 考察

高齢者の社会関係の広がり（質（親密度））に関して、最初に個人的社会関係の全体的な広がりとして「家族同様のつきあいのある人」の人数（量）と校区内外のどちらが多いか及び、親しくなったきっかけ（広がり）について検討した。次いで個人が居住する近所の人との社会関係に限定して、会話の頻度（量）やつきあいの内容、つきあいの場（親密度）を社会関係の広がり（親密度）として検討し、最後に相互支援の程度と親密度の関係について検討した。

ただし、人間関係を構成する因子の中で、友情は情緒的な親しさを示し、「気心の知れた仲」や「一緒にいてほっとする」相手がこれに該当する。一方、「些細な用事をしたりしてもらう」等の相互支援の因子は「家族ぐるみのつきあい」と同様に親戚づきあいの因子であり、この両者は相対的に独立した関係にあるとされている。これに拠ると、最初の個人的社会関係の全体的な広がり（量）と捉えた「家族同様のつきあいのある人」は後者に該当し、「些細なことをしたりしてもらう」関係の広がりともいえる。その広がり（量）は、調査では相手の年齢や性別を質問していないため属性は不明ながら、居住する校区外に多いという結果を得たことになる。その平均人数は4人近くになる（20人以上と回答した人が0.1%に満たないことから外れ値として処理したことは大きな影響がないと考える）。相手は親戚、仕事関係の人、同窓生・同級生が多くを占め、近所の人（近所の人）はこれらに続く順位であった。一方、校区内の

表5 近所の人との会話の頻度と相互の支援の関連（多重回答）

		ほとん ど毎日	週に 4、5回	週に 2、3回	週に 1回	ない
手 助 け し た	高齢者の見守り・声かけをした	64.7	57.1	40.3	33.3	16.7
	相談に乗った	35.3	42.9	19.4	15.4	2.1
	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	35.3	42.9	17.7	15.4	8.3
	子どもの世話をした	31.4	14.3	12.9	—	6.3
	食事を作った・食事を届けた	21.6	21.4	8.1	7.7	2.1
	買い物をしてあげた	19.6	28.6	—	—	4.2
	留守番・留守宅の見守りをした	15.7	10.7	12.9	5.1	2.1
	庭の除草・剪定・手入れをした	15.7	17.9	17.7	7.7	10.4
	物を貸した（道具・食品・日用品）	13.7	14.3	1.6	2.6	4.2
	掃除をしてあげた	11.8	17.9	4.8	5.1	—
	その他の手助けをした	11.8	17.9	4.8	2.6	6.3
	家の補修・手入れ（電球の取替えなど含む）	7.8	21.4	12.9	5.1	2.1
	外出時の送迎・付き添いをした	7.8	14.3	1.6	—	2.1
	看病・介護をしてあげた	7.8	14.3	6.5	—	—
	仕事の手伝い（農作業を含む）をした	7.8	28.6	1.6	—	2.1
	お金を貸した	—	3.6	3.2	—	2.1
手 助 け し て も ら っ た	情報提供（お買い物・病院・福祉・教育の情報）	33.3	25.0	12.9	12.8	4.2
	高齢者の見守り・声かけをしてもらった	27.5	21.4	14.5	17.9	6.3
	留守番・留守宅の見守りをもらった	19.6	14.3	9.7	2.6	4.2
	買い物をしてもらった	13.7	14.3	3.2	—	6.3
	相談に乗ってもらった	13.7	25.0	4.8	7.7	6.3
	庭の除草・剪定・手入れをしてもらった	11.8	3.6	8.1	2.6	2.1
	食事を作ってもらう・食事を届けてもらう	9.8	14.3	4.8	5.1	4.2
	家の補修・手入れ（電球の取替えなど含む）	9.8	3.6	4.8	2.6	2.1
	その他の手助けをしてもらった	7.8	10.7	8.1	2.6	4.2
	物を借りた（道具・食品・日用品）	5.9	10.7	1.6	—	4.2
	掃除をしてもらった	3.9	—	8.1	—	2.1
	外出時の送迎・付き添いをしてもらった	3.9	7.1	—	—	2.1
	看病・介護をしてもらった	3.9	7.1	1.6	—	—
	仕事の手伝い（農作業を含む）をしてもらった	3.9	3.6	1.6	—	—
	子どもの世話をもらった	2.0	3.6	1.6	2.6	2.1
	回答者数	51	28	62	39	48

相手は近所の人が最も多くを占めるが、校区外よりも社会関係は不活発であることが図1からも明らかである。

次は、その校区内を想定して近所の人（質問の結果、校区外にも近所の人存在したので、ここではそれも含まれると考える）との社会関係を質問し、その量と質を日常の会話の頻度から検討した。日常の会話を通した自己開示と親密度の関連については、上述したジュラード, S. M やウォンドーアニク (Won-Doornink, 1979) が関係の段階で話される話題について、加藤(1977)が青年期までの発達の社会関係の変化について報告している。これによると、話される話題の内容は将来関係を続けて行きそうな人の話題と中程度個人的話題 (medium-intimate statements) の一般的に誰でも共有する話題 (教育、社会問題等) に止まる。中間段階 (関係がさらに発展すると思われる期間1年以内の知人) には個人的話題が最も話され、上位段階 (同性の最良の友人) とは中程度個人的話題が最も話され、非個人的話題が話される頻度は極めて少なくなる、と報告されている。また、加藤は、青年期の自己開示の程度は全体的に低い、中・高・大学と進につれて親密度も信頼性も高い対人関係を持つ可能性があることを報告している。青年期以降では卒業・就職・停年等の転機に社会関係が変化することで自己開示も変化することから、親密な関係の構築と自己開示の内容の変化に関連性があることを示唆している。

近所の人との会話の頻度の質問では内容が個人的か一般的か等の質問はしていなために、親密度をこれから推測することは難しいが、会話の頻度が高くなるほど、親密度が高いとともに関係がさらに発展すると思われる相手か、近所の友人とも推測できる。事実、調査結果では「相手や自分の家」がつきあいの場の人がかんりの比率で存在することは親密度の高さを示唆している。しかし、これが、情緒的な親しさなのか、親戚づきあいのかは分からない。今後の課題ということである。

不明な点が多々ある近所の人とのつきあいと相互支援関係の関連を、少し強引に推測すると、つきあいがある人に限定されるが、「双方の家」がつきあいの場である人が4割以上存在し、つきあいの内容が「物をあげたりもらったり」「立ち話程度」の6割以上の人以外が、親戚づきあいの因子に該当すること。また、趣味を共にしたり、互いに相談事をするのは日常会話での自己開示の面でも親密度の高い相手と位置づけられよう。

つまり、4割程度の方は近所に親戚づきあいの因子に該当する相手をもっていることになる。その結果が相互支援であるが、支援はそれを必要とする頻度に左右される訳であるから、「見守り・声かけ」「相談」「情報提供」「子どもの世話」「食事をつくる」「買い物をする」等はニーズの頻度が高く、「些細なことをしたりしてもらおう」親戚づきあいの関係の中で提供し合えることであり、「仕事の手伝い」「お金の貸し借り」「看病・介護」「外出時の送迎」等は頻度も低く、親戚づきあいの関係の範囲を超えているのかもしれない。以上は、分析に必要なデータが不足している面があり、今後の課題が多く残った。

北九州市の人口構成は2005年時点では、総人口 992,654、15歳未満人口 131,893 (13.3%)、15～64歳人口 639,776 (64.5%)、65歳以上人口 220,985 (22.2%) であり、政令市の中では最も高齢化率が高い。2007年では総人口 984,754、15歳未満人口 130,716 (12.3%)、15～64歳人口 626,087 (61.5%)、65歳以上人口 227,951 (23.1%) と変化している (2005年は国調、2007年は住民基本台帳から)。今後は高齢化・少子化とともに人口減少が加速し、都市部内での過疎化も予測されることから、近所の人との関係を社会関係資源として維持発展させることが益々重要になるであろう。その観点からも地域のソーシャルキャピタルに関する調査研究が必要である。

なお、ここで使用したデータは2006年11月18日～30日に実施した関門地域共同研究の「関門地域まちづくりアンケート」調査の一部である。

(都市政策研究所 教授)

引用・参考文献

加藤隆勝「青年期の自己意識の構造」心理学モノグラフ No.14 日本心理学会, 1977

古谷野亘、西村昌記、矢部拓也他「関係の重複が他者との交流に及ぼす影響；都市男性高齢者の社会関係」老年社会科学, 27, 17-23, 2005

Jourard, S. M., The Transparent Self: Self-Disclosure and Well-Being, D. Van Nostrand Company, Inc (岡堂哲雄訳「透明なる自己」誠信書房, 1974)

————— Self-Disclosure: An Experimental Analysis of the Transparent Self, John Wiley & Sons, Inc, 1971

Won-Doornink, M. J., On Getting to Know You: The Association between the Stage of a Relationship and Reciprocity of Self-Disclosure, Journal Of Experimental Social Psychology, 1979, 15, 229-41